

ショーペンハウアー：意志の非実体的解釈

稲益, 達朗
九州大学大学院：博士課程：哲学

<https://doi.org/10.15017/1440762>

出版情報：哲学論文集. 39, pp.81-97, 2003-09-25. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

ショーペンハウアー——意志の非実体的解釈

稲益達朗

ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』は世に出てからというもの、数々の誤解に晒され続けている。この書に対する誤解はそのままショーペンハウアー哲学全体に対する誤解となる。というわけは、主著以外に刊行されている彼の書物は主著に関する註釈書にすぎないともいえるからである。¹⁾ショーペンハウアー哲学は『意志と表象としての世界』に始まり、そこに尽きる。彼が道徳を論じた『倫理学の二つの根本問題』にしても、主著で展開している思想の一部をそのまま膨らませたものなのであり、決して新規に問題を論じ直しているわけではない。

ショーペンハウアー哲学に関する誤解とは、具体的に言うると、彼の持ち出す意志 *Willkür* という概念に関する誤解である。ショーペンハウアーのいう意志とは、彼以外の哲学における使用も含めて、私たちが通常用いている意味とは全く懸け離れたものであると考へなければならぬ。哲学史の内部でも、ショーペンハウアーにおける意志概念はその本質部分を見誤られ続けている。本稿における私の目的はショーペンハウアーの意志概念をこの不幸な境遇から救い上げることである。その作業を一言で述べると、意志に関する実体的解釈を非実体的な解釈へと導き直すことである。²⁾そのため私はショーペンハウアーの意志に関して正しい理解を示すつもりである。それで、まずショーペンハウアー哲学に対する誤解がどうい

であるかを説明することから開始する。

一 ショーペンハウアー哲学の受けている誤解

ショーペンハウアー哲学に関する誤解とはどういうものであるかを説明する。私たちが見、聞き、触れている世界は、世界の本当の姿ではなく、仮象、つまり表象 *Vorstellung* としての世界にすぎない。世界の本当の姿とは何であるかというところには意志なのである。意志とは私たちには通常関知することのできないものである。そして、表象としての世界とは、その意志が私たちの与かり知れる形姿へと客観化したものなのである。これはショーペンハウアー哲学の根本命題であるが、読者を誤解へ導く要因はここに既に顔をのぞかせている。誤解が発生するのは、表象が意志のあらわれであるという事態をどのように解釈するかという点においてである。通俗的な理解は、意志を世界原因として実体的にとらえるのである。これは表象としての世界の裏側、あるいは地下深くに意志を据えて、意志はそこから私たちに厲気様を放射している、とする見方である。これは比喻ではなく、意志を原因化・実体化してとらえるということは最終的にこのような図式に到着する。ここでは意志が原因、表象は結果という見解がとられている。この見解において、意志と表象は二つ別のものとして措かれていて、一方は私たちに知られる世界であり、もう一方は私たちには知られない世界である。これは二世界説である。そして、二つの世界は因果の関係にある。

だが、これはショーペンハウアー哲学解釈としては全くの間違いであると私は考える。ショーペンハウアーは二世界説を唱えているのではない。世界はただ一つである。彼は同じ一つの世界について、それが意志であると同時に表象であると述べたのだ。二つの間に因果的關係はない。二つは意志即表象の形に重ね合わせて一世界説として考えられなければならない。これが本稿において私が示したいことである。これからその論証を行う。

二 手がかりとしての身体

ショーペンハウアーが世界を意志であると同時に表象であると見なすにいたる手がかりを得るのは、他ならぬ身体を通してである。そこで、ショーペンハウアーの身体観について説明をしておく必要がある。

身体は「二つのまったく異なった仕方と与えられている。第一は、悟性的な直観における表象として、客観のなかの一客観として、客観の諸法則に従うものとして与えられている。第二には、同時にまったく別の仕方と、すなわち意志・という言葉がその特色を端的にあらわしている、誰でも直接に知っているものとして与えられている」⁽³⁾。身体は表象であると同時に意志である。すなわち、ショーペンハウアーによると、世界におけるあらゆるものは有機物から無機物にいたるまでことごとく意志のあらわれであるが、私たちの身体もその一つだといっているのである。しかし、私の身体以外の客観を直接に意志として感得することはできない。それは類推することでは知られるにすぎない。私の身体は意志を直接に知ることのできる唯一の客観として他人の身体に比して特別なのだ。一面では客観すなわち表象である身体が、他面では意志であるということから類推すると、私の身体以外の客観にも同じことが言えるのではないか。ショーペンハウアーはそう考える。こうして、身体を根拠に意志即表象の図式が「私の身体」以外の諸客観、つまり現象世界全体へと押し広げられてゆく。「われわれが自分の身体の本質と働きとについて得ている二重の認識、「中略」完全に異質な二つの仕方と与えられているこの認識を、これより先、自然界の各現象の本質を解く鍵として用いることにしていきたい。自然界のあらゆる客観は、われわれ自身の身体ではないから、二重の仕方と与えられているわけではなく、ただ表象としてわれわれの意識に与えられているにすぎない。しかしわれわれは、これらあらゆる客観をも、身体との類似性 Analogie によって判定することにしてみよう」⁽⁴⁾。

私たちが見なければならぬのは、「私の身体」の特性が、自然界全体へと適用されたということだけではなく、何のため

にそのような類推が行われたのかという、ショーペンハウアーの企図である。前者の方にはばかり気をとられていると、彼の哲学は人間以外の全自然界の原理をも人間の原理で理解しようとした人間中心主義を提唱したにすぎないことになりかねない。類推はあくまで類推にとどまることを彼は承知している。「私の身体」以外の諸客観は私には単なる表象である。しかし、それでもあえて、他の客観についても「私の身体」と同じように表象でありながら意志でもあるかのよう^①に観察してみるならばどうか。ショーペンハウアーはこのような仮定に基づいて考察を進める。彼は万物を意志であると独断的に決めつけているのではない。彼の考察はあくまで類推の圏域内に留まるものである。

ショーペンハウアーの目標は身体を論じることにあるのではなく、むしろ、それが活躍しているまさにこの世界とは何かを明らかにするところにある。つまり、私たちの経験する世界は認識上の制約を受けていることを承知の上で、それでも制約を取り除いた場合、そこに何が見えるかということを追究するわけである。無論、ショーペンハウアーに言わせると、そこには意志が見えるのである。

ところで、ショーペンハウアーが呈示する世界解釈がどのようなものであるのかを説明する前にもう一つ確認しておかなければならないことがある。それはショーペンハウアーの立脚点である。

彼の立脚点はしばしば見誤られてきた。ヒューブシャアの言うように、ショーペンハウアーの当時から現代に至るまで続く矛盾論争の火種は、主著第一巻から第二巻へ移行する際の立脚点の転換にある^②。すなわち、世界を表象として見る立場から、世界を意志として見る立場への転換をどのように考えればよいのかという問題である。私が思うに、普通はこの転換を空間的な位置移動のようなものにとらえている。空間的移動というのは、世界の裏側か、あるいはその地下に、つまり表象世界とは地続きのどこかにある意志の世界へと移るといふ意味である。「表象としての世界」から「意志としての世界」への転換を空間的移動に理解してしまうのは、しかし間違っている。そもそも「表象としての世界」の裏側あるいは地底部なる場所はどこにもない。「表象としての世界」においてはどこまで行こうと表象だけの世界である。同じ一つの世界が見方の相

違により意志と表象とに分かたれるのである。二つを地続きのように考えると、表象としての世界のどこかに意志を探し求めるといふ倒錯的な事態が現出する。

それでは「表象としての世界」から「意志としての世界」への転換はどのように理解すればよいのか。ショーペンハウアーはどのような立脚点よりこの転換を語るのか。

私の考えによれば、ショーペンハウアーにおける「表象としての世界」から「意志としての世界」への転換は、単純に、個体の興味を離れて世界を見るようになることだと考えている。つまり、脱個体化による転換とでも呼ばれるべきものである。すなわち、空間性や時間性ならびに因果性を内容とするところの「個体化の原理 principium individuationis」に縛られた物の見方から出ることだといふのである。主著第二巻では世界におけるあらゆる事物、無機物から植物、動物、人間まですべての現象はすべて一つの意志のあらわれであるということが論じられているが、表象としての世界においてはその一つの意志が多様な個体へと差別化されてあらわれている。「個体化の原理」を通して見られた世界の諸事物について言及しながら、それを貫く超個体的な意志を把握している彼は、この世界が「表象としての世界」であると同時に「意志としての世界」であることが見渡せる高みに身を置いている。世界を表象として見ることができるとは一方でこの世界が意志でもあることが認識されていなければならない。というのも、表象は意志とは独立的に表象であるのではなく、それが意志のあらわれであるということから表象と呼ばれるのであるからだ。つまり、世界が意志であると認識されていないときは世界が表象であることも認識されていないのである。世界が意志であり表象であるという認識は同時に達成される。世界に意志と表象の相貌を付与することが可能になる地点、こここそが主著の第三巻と第四巻で論じられる、意志が否定された「純粹認識」の境位⁶である。そして、後に述べるように、「純粹認識」の境位とは、個体の興味・関心から離れた物の見方だという点で芸術家の境位でもあるのだ。

ショーペンハウアーは第一巻のはじめから第四巻の終りまで一貫してこの立脚点より記述を進めている。つまり、彼は意

志と表象とを同時に眺めている。それゆえに、第一巻と第二巻との間には「転換」などないとも言える。何らかの段差が感じられるにしても、それはそこにおいて初めてショーペンハウアーの立脚点が発見される契機となるというほどのことではなく、その段差も錯覚にすぎないということにすぐさま気付かされるであろう。「表象としての世界」を語るときも「意志としての世界」を語るときも彼は常に同じ哲学的立場を維持している。彼はそこから一歩たりとも動かない。そして彼の目は何に据えられているかといえは、それは意志でも表象でもなく、世界についてなのである。

彼は「意志としての世界」から「表象としての世界」を語るのでも、「表象としての世界」から「意志としての世界」を語るのでもない。彼は「純粹認識」という立場から世界を望見するのであり、そのとき「意志としての世界」と「表象としての世界」は相即の関係に重ね合わせられている。続いて「即」の意味をショーペンハウアーの身体論より読み取る作業を行う。

三 意志即身体

ショーペンハウアーは意志と身体運動についての関係を次のように述べている。「意志のほんとうの働きといえは、それはいずれであれ、ただちに、必然的に、身体(8)の運動のことである。これは意志を作用因として表象世界における身体(9)の運動が引き起こされるといふことを述べているのではない。右の文章に続けて彼はこう書いている。「意志の働きと身体(9)の活動とは、因果のきずなが結んでいる、客観的に認識された二つの異なる状態なのではない。それらは原因と結果という関係にはなく、一つにして同じものなのであって、ただ二つのまったく異なった仕方(9)で与えられているだけのことなのである」。意志と身体運動における「即」の関係を「一つにして同じ」という言葉がよくあらわしている。ある一つの身体行為、ふるまいは物理学的生理学的法則に従うところの客観的運動であるが、それは同時にまた意志そのものの主観的運動でもあるのだ。

意志という概念がショーペンハウアーにおいてはきわめて特殊な意味で用いられていることについては既に注意を与えておいた通りである。意志が行為を命じているのではなく、行為や動作そのものが意志的なのである。⁽¹⁰⁾ 意志は原因や結果の内などにあるというような局所的なあり方をしてはおらず、原因や結果を含めた身体の動き全体が意志の様相を帯びている、という仕方であらわれるのである。そして、このことは人間の身体運動に限らず、無機物、植物、動物など世界の事物すべてについて言われるのである。この「意志的」ということを彼は、自然の諸事物の根底には意志がはたらいている、であるとか、人間は各個人の内にその本質を有している、などの言い方で表現するため、どうしても各々の事象の内側に宿されている実体的な力として意志が理解されてしまいがちである。

意志は身体運動の出発点に存在するというものではなく、運動全体が意志的なのである。身体運動と意志におけるこのような「即」の関係は、行為と動機をめぐる彼の記述にも認めることができる。「わたしが一般的になにかを意欲しているという事実や、一般的になにかを意欲しているかという内容、すなわちわたしの意欲の総体を特色づけているような格率を、動機が規定することはけつしてない。それゆえにわたしの意欲は、その本質そのものからいって、動機からは説明できないのである。動機は要するに、与えられた時点における意欲の発現を規定するだけのものであつて、動機はただわたしの意志が外に現われる単なるきっかけにすぎない。これに反しわたしの意志そのものは動機づけの法則の範囲外にある。ただそれぞれの時点における意志の外への現われだけが、この動機づけの法則によつて必然的に規定されているにすぎないものである。⁽¹¹⁾ある行為がどのようにして生じたか、ということからは、その行為の意味は出てこない。動機を問うとは、ただ結果から原因へと無限に遡ることであり、そこからは行為全体の意味を引き出すことはできない。「原因論的な説明とは、いずれもな、一つの個別的な現象が、時間と空間のなかで必然的に定められている位置に、一定の規則に従つて、必然的に出現することを示すだけで、それ以上のことはなにもできない⁽¹²⁾」。原因論的な説明というのは、ある行為、ふるまい、身体運動について、物理学・生理学的あるいは心理学的な説明を与えることである。原因論的な説明は、個別的な一現象が出現するまでの

過程を無限に遡ることのみに関与し、現象それ自体の意義や内容についての考察には一切関知しない。というより関知できない。なぜなら、現象の意味は、現象の原因と結果の系列の内に見出されるのではなく、意志の上こそ見出されるものだからである。

四 「私」と「私ならざるもの」

「即」ということの意味を理解するためには、身体に立ち返らなければならない。なぜかといえば、ショーペンハウアーが意志即表象の結構を取り出すのは他ならぬ私たちの身体だからである。「身体こそ世界中でただ一つの現実的な個体である。すなわち身体こそただ一つの意志の現象であり、かつ主観にとつてのただ一つの直接の客観なのである」⁽¹³⁾。数多ある客観の内、「私の身体」という客観だけは直接的 unmittelbar なものであり、そのことが現実的 wirlich であるということの根拠となるのである。しかし、逆に言うと「私の身体」以外の客観は間接的な客観であるため、現実的なものとは見なされない。ここに「自分自身以外のすべての現象を幻影とみなすにいたる」⁽¹⁴⁾ エゴイズムが発生する。エゴイズムの発端となる「私の身体」以外の客観は現実味のない幻影であるという考えは「証明によつてはけつして論駁できない」⁽¹⁵⁾。なぜなら「わたしが意志についていづく認識は、直接的な認識ではあるけれども、わたしの身体についての認識から切り離すことはできない」⁽¹⁶⁾ からである。現実性の根拠が意志にある以上、直接に意志を感得することのできない客観には現実性が認められないのである。ショーペンハウアー哲学は、この限界の上に構築されている。この限界を認めた上で、世界を意志であると述べているので、この命題は独断的ではないのである。

ここで、身体と「私」の関係について説明しておくことにする。それは「私」と意志の関係を確定することでもある。意志とは「私」の内ではたらくものではないことに注意したい。

「私の身体」と「私」は区別される。「私」というのは客観化された意志である。「私」を省いた「身体」とは何よりも先ず直接的には意志である。そしてここで意志はまだ個体化してはいない。つまり「私ならざるもの」であるといえる。⁽¹⁷⁾ それゆえ「私の身体」という言い方においては個体化した「私」と、個体の次元とは位相を異にする意志という「私ならざるもの」が交錯しているのである。「私ならざるもの」とは自に対する他を意味するのではなく、自と他の区別そのものが消失する次元を指している。それは「我」と「非我」の関係ではなく「私」と「無私」の関係である。「私ならざるもの」を「無私」と呼ぶ理由は、ショーペンハウアーがここを土台にして、他人の苦しみを自分のものとして共に苦しむ (Mitleid) ことの道徳論を説くからである。「私」とは、人類という大きな営為の総体の一部分、一細胞をなすものでしかない。形の上でこそ、「我」と「非我」とに分化しているが、人類を一つの生きものとして考えるならば、「非我」の苦しみは「我」の苦しみと別物ではありえないはずである。ここにおいて、「我」と「非我」の区別を超えた無私無欲な態度が生起するのである。それゆえに、「私ならざるもの」は「無私」でなければならぬ。身体的一端は「私ならざるもの」に属している。意志が「個体化の原理」を通して客観化され、その様々なあらわれの一つが「私の身体」として、他の客観の間から特選される。その選別の根柢となるのが意志である。「自分の身体は他の表象とはまったく別の、ぜんぜん種類の異なった仕方では意識されてくるのであって、これが意志という言葉で表わされるものである」⁽¹⁸⁾。身体が意志として意識されるということ、身体が他の表象の間に伍する客観であるということ、この二つの条件の上に「私」は成立しており、どちらか一方が欠けても「私」は成立しない。

「私」とは常に他の客観との区別の中から生じるものである。「私の身体」を表象として見るならばそれはまぎれもなく「私」としての身体である。だが、意志として見たとき、それはもはや「個体化の原理」を介していないため「私ならざるもの」としての身体なのである。身体が認識主観に対する客観であるかぎり、私の表象であるということではある。だが、身体を私の意志ということはできない。なぜなら「私」は意志が個別に客観化することで成り立つものであるから、意志そのもの

を「私」の中に区切るという事態は順序を転倒しているからだ。だから、私たちが普段用いている「私の意志で身体を動かす」という論理はここでは通用しない。身体を動かすのは「私」ではなく、意志である。「私」とは身体に付属する標識のよくなものである。つまり、行動に出たのが他の誰かの身体ではなく「私の身体」であるということを告げ知らせるものではないのだ。私たちの日常的な感覚からすると、この論理はとてつもなく奇妙に響くかもしれないが、ショーペンハウアーの意志概念はこのような意志を指しているのである。

「私」と「私ならざるもの」は身体において交錯している。「私」即「私ならざるもの」という形態において「私」は中心に据えられてはいない。「私」が中心に据えられるのは「個体化の原理」を通じた表象としての世界においてである。「私」は意志に直接の関係をもつものではない。意志と直接の関係をもつのは身体である。「私」の本質に意志があるということは言えても、意志の本質に「私」があると行うことはできない。意志即表象の「即」ということの焦点に浮かび上がるのは「私」ではない。問題の中心はむしろ「私」と「私ならざるもの」の重なり方である。この重なり方については後論する。

このように、ショーペンハウアーの身体論は「私」の特殊個別性を中心に組み立てられている。それゆえ、身体論に留まり続けるかぎり、「私」を中心に据える議論から脱することはできない。しかし、ショーペンハウアーの身体論は、彼の哲学的立場を表明するための一方途なのである。彼は身体を通して「即」を具体的に説明した。今度はそれを手がかりに「私の身体」以外の全客観を「即」の様態の下にあるものとして見ようとしたのだ。ここにおいて初めて世界は「意志と表象としての世界」の像のもとに眺められることになる。私たちは身体から世界へ移らなければならない。ショーペンハウアー哲学の核心部は世界にある。それは意志即表象の身体という具体事例から類推することで得られた意志即表象の世界である。

五 意志の非実体的解釈

私が考えている意志の非実体的解釈の基本的特性は意志と表象の間に一切の因果関係を設けないところにある。意志と表象に時差はない。同じ一つの世界がある側面から見られると「意志としての世界」であり、別の見方をするると「表象としての世界」なのである。二つの世界が存在するのではない。世界は一つしかない。今私たちが生きているこの世界が一つあるだけである。

イ 認識から「純粹認識」へ

ショーペンハウアーの身体論において、「私」と「私ならざるもの」とを「即」の形で接合するのが身体という現場であるように、その身体論から類推により押し広げられた彼の世界論においても、意志と表象とを接合する何かが必要とされる。私の解釈によれば、ショーペンハウアーはこの結節点を「認識」であるとしている。認識は、表象としての世界に客観化してあらわれている意志が自己の目的達成のために奉仕する役割を与えられているものである。認識は意志の道具である。「意志は認識の光に照らされるときには、自分がいま何を、ここで何を欲しているかをつねに知っている」¹⁹⁾。ここでいう「自分」とは個体の「私」を指すものではない。「即」の現場において「私」は中心にはこない。「私」という個体は事態の一面をしか代表していない。認識は表象世界において個体を通して活躍するが、同時にそのはたらきは個体を超えた、意志という別の力に属しているのである。認識とは個人名義のものではないことを覚えておかなければならない。それゆえに、認識は個体に奉仕するのではなく、意志に奉仕するといわれるのだ。つまり、認識においても身体においてと同じように、「私」と「私ならざるもの」が交錯している。一方で認識は個体を通じてのみはたらくものであるが、他面でその認識は意志の目

的に準じているものである。

ところで、認識はある特異な性格を有している。「認識が意志に奉仕しているということ、これは動物の場合には完全にそのとおりに考えられなければならないのに対し、ただ人間にあつては、ほんの例外としてではあるが、そうでない場合が發生することがある」⁽²⁰⁾。すなわち認識が例外的に意志の下僕であることから離れて、純粹な認識主観となるのである。「認識が意志への奉仕から解放され、ほかでもない、そのことによつて、主観が単なる個体的な主観であることをやめ、いまや意志のない純粹な認識主観となり、もはや根柢の原理に従つて雑多な相互関係を追うようなことはなく、目の前に示された客観を、他の客観とのつながりなどを無視して、しっかりと観照(Kontemplation)、観照のうちに安らい、そして観照する行為のうちに同化してしまう」。「純粹認識」とは、個的な対象をではなく対象のイデアを見る芸術の境地でもある。「意志と表象としての世界」という見方が生れるのはここである。「純粹認識」とは認識のメタレベルを指すのであり、そこにおいて「純粹認識」は、認識について、それがいかなる現場でその力を行使していたのか、かつ、いかなるもののために使役されていたのかということを反省的に取り出すことが可能になる。

先に述べた、ショーペンハウアーの哲学的立場とは正にここである。ショーペンハウアーは「表象としての世界」から、「意志としての世界」を語るのでも、「意志としての世界」から「表象としての世界」を語るのでもない。彼の前には私たちが生きているこの世界があるだけである。その世界から一定の距離を置いて眺めてみたときに、私たちが個体として見、聞き、触れる世界が「表象としての世界」であるということが判明する。たとえば、人間と動物、あるいは同類の内でも個体の違いにより、組み立てられる世界観はそれぞれ異なるのである。だが、互いに相違する世界観は個体の視座に留まるかぎり相違するのであり、個体を超えて、総体として見ると、この世界は一つの意志なのである。このように言うとき「意志としての世界」と「表象としての世界」の間には深い断絶があるように思われるだろう。しかし、二つは一つの世界についての別々の見方であるという差をもつだけである。その二つの見方は、同じ一つの世界についての見方であるがゆえに、同時に与え

られるのである。世界が表象であるといわれうるのは、それが意志の表象であるからだ。

続いて、ショーペンハウアーがこの「純粹認識」の視座よりとらえた世界を再構成してみることにする。私は、意志と表象を以下のようなモデルで捉えることが、ショーペンハウアー哲学を矛盾のないかたちで理解するための鍵になると考えている。

口 非実体的な意志

私の提案したい、意志の非実体的解釈とは次のようなものである。

人間を含む数限りない個体、無機物有機物を問わず、それら諸客観は互いに接して影響を及ぼし合う、関係のネットワークを形成している。それぞれの個体は、ネットワーク中の一交差点に固定されており、そこから見渡すことのできる視界は限られている。この限定された視野が「表象としての世界」を指す。そして、意志とはこのネットワークという組織の名である。言いかえると、意志とは、数限りない「私」を項目にして織り成される諸客観同士の関係の場を指しており、表象とはその場において固定された任意の一点である。「私」の視点から眺められた世界のことである。世界上にある事物は無機物有機物を問わず、ことごとく意志のあらわれである。「表象としての世界」においては、それら数ある客体のうちでただ一つだけ他の客体とは別格のものがあり、これが「私の身体」と呼ばれるものである。「私の身体」の特徴は、この客体だけが表象であると同時に意志としても感得されるといふところにある。「私」という存在が諸々の個体の間において突出した存在であるのもそれを根拠にしている。世界における事物のそれぞれは自らを「私」として立てて、それぞれの形で自己主張を行う。「私」という任意の一点を離脱することで、今まで自らが所属していたネットワークを上空から全体的に捉える視点が獲得され、そこに「意志としての世界」が見出されるのである。そして今一度地上に下りて、無数にある「私」のうちの一つに立ち帰り、そこから世界を見回すならば、世界は「私」の認識するかぎりの世界、「私」の表象としての世界なのである。

「表象としての世界」と「意志としての世界」とは、同じ一つの世界を「私」の視座から覗くか、「私」を離れて鳥瞰的に眺め渡すかの違いにより生ずるもので、二つ別箇の世界についての議論ではない。

それぞれの「私」は他の「私」を客体として扱ふ。人間が自分の身体を維持するためにものを食べたり、道具を使うなどする場合がそうである。これは、「利己的」ということにもつながるが、ショーペンハウアーによると真に利を得るのは「私」ではなく、意志であるということになる。意志は「私」の内側においてはたらくものではない。「私」が意志を役するのでではなく、意志が「私」を役するのである。それゆえ、「私」の意志、ということとはできないのである。「私」とは意志のあらわれ、意志が自己実現のために客観化、個別化したものであり、意志に使役されるためのものである。「私」の意志、という表現は、意志の「私」、に訂正されなければならない。ショーペンハウアーは意志は一つであると述べているが、それは無数の「私」を抱えた世界全体をひとまとめにして一つの意志であると見なしているということである。すなわち、それぞれが自らを宇宙の中心と考えている無数の「私」が互いに必要とし必要とされる関係において張り巡らし合う連絡網全体が意志なのである。意志は実体の形をとるのではない。実体の示す様態こそが意志なのである。言いかえると「表象としての世界」における個物間の関係とその変動こそが意志なのである。「表象は意志のあらわれである」というときの「あらわれ」はこの意味で理解されねばならず、光源を背にした原物に対するその投影のような意味でとらえてはならない。

ある個体が何かを意志する、意欲するとは他の客体との間に関係をつけるということである。ところでそれは、これから関係をつけようとするのではなく、欲したときには既に関係は結ばれているという事後性につねにつきまとわれている。ショーペンハウアーは述べている。「古い見方では、人間は認識したものを欲する」というのであるが、わたしの見方では、人間は欲したものを認識するのである⁽¹⁾。認識するというのは、ここでは事物を「私」との連関においてとらえるということだが、ある事物を認識したとき、それは既に意欲されたものであるのだ。つまり、「私」の内にある意志が「私」の外にある何らかの対象を認識して、その後、それへ向けて手を差し伸ばすというような構図ではなく、「私」はある環境の只中に既に放

り込まれているのであり、望むと望まぬとに拘わらず、人や物との関係を常時構築し更新しつづつあるということがここでは語られているのだ。認識されたもの、言い換えると、「私」と関係を結ぶものはことごとく、何らかの度合において意欲されたものである。そして、ここで関係が結ばれているということ、この様態が意志と呼ばれるべきものである。

人間が絶えず何らかの欲望に駆り立てられてあるというのは、「私」をめぐる諸客観同士の関係が入れ替わり立ち代わり變動していることにほかならず、その変動こそまさに意志の動きなのである。「私」は「私」の生存に必要なものとだけしか連絡関係を締結しない。表象としての世界とは、厳選された事物のみから構成された「私」的な世界である。世界は「私」の表象である、と言われるのはこの理由による。生物においては、どの客体と連絡を結ぶのかという選別は先天的になされている場合がある。人間には見えない光線のある種の昆虫はとらえることができる場合などがそれである。⁽²²⁾また、人間の場合には、感覚器官の先天性の他に、個人、民族などの多様性から後天的に形成される表象世界も考慮に入れる必要がある。世界は「私」の表象であることが、人間の多様性を裏打ちしているのではないか。「私」は「私」の興味を引くもの以外には目もくれないのである。ただし、興味の対象は時々刻々めまぐるしく移り変わるものであり、そのつど新たな連絡関係が結び直される。

六 「意志の否定」理解

最後に、補足として「意志の否定」(Verneinung des Willens)について一言しておく。「意志の否定」は主著第四巻の末尾で論じられるもので、普通これは宗教的に、出家、解脱、あるいは遁世のようなものとして受け止められている。さらに、意志を世界原因、生命の源と見なす通俗的な見解からは「意志の否定」とはすなわち命を絶つことであるという受け止め方もされることになるが、これは全くの誤謬である。「意志の否定」とは個体の破壊(Vernichtung)ではない。そうではなく、個体

が他の個体と共に組み込まれている関係を解消することなのである。

先に私は意志について、それは数多の「私」を項目として編み上げられた関係の場であると述べた。関係とは客観同士の相互関係のことを指している。世界の様相をこのように達観することのできる地点が「純粹認識」の境位である。「意志の否定」とは「私」を「表象としての世界」における諸客観同士の関係の網から引き去ることである。つまり、意志という実体的な何かを叩き潰すことではなく、世界を結束していた「私」が脱落することにより、意志という関係の場が消失してしまうのである。これにより、今まで私見私情を交えた利害損得の相貌のもとにあらわれていた世界、すなわち意志としての世界がその結末点を失い崩壊してしまう。そしてもはや、諸々の事物は用不用という価値を離れて、事物そのものの姿をあらわすのである。諸々の表象は、「意志の否定」後にその姿を消したりはしない。ただ、それらが一員をなしていた体系が解消されてしまうため、諸表象は互いに関係し合うことをやめてしまうというだけである。「ただ認識だけが残り、意志が消えてなくなってしまった」という「意志の否定」に関するショーペンハウアーの表現が指しているのはまさに右のような事態である。そしてこの、意志を否定した境位こそ、世界をあるがままの姿で眺望する、哲学者の視座なのである。そして、世界のあるがままの姿とは、ショーペンハウアーに言わせると意志なのである。この視座において世界は意志であると同時に表象でもあるということが見出される。しかし、彼はどちらか一方の世界にのみ重きを置いていたわけではない。片方が虚構の世界でもう片方が現実の世界だということではない。この世界が「意志としての世界」であるということが真実であるのと同じだけ、この世界が「表象としての世界」であるということも真実なのである。

註

使用テキスト『意志と表象としての世界 Die Welt als Wille und Vorstellung』に關して、原典はArthur Schopenhauer *Samtliche Werke Textkritisch bearbeitet und herausgegeben von Wolfgang Fhr. Von Löhneysen Bd. I, Suhrkamp, 1986* [WWV I と略記]を用い、邦訳は『中公バックス 世界の名著45 ショーペンハウアー』、西尾幹二編訳、中央公論社、一九八〇年、を用いた。引用文は基本的に邦訳のものを借りたが、変更した箇所がある。

(1) 『意志と表象としての世界』は正編(一八一八年)と続編(一八四四年)とに分かれて出版されているが、続編は正編で展開された理論について、より個別具体的な説明を補足しているものにすぎず、そこに思想上の変更や進展などは一切ない。本稿で「主著」と呼ぶものは正編を指す。

(2) 同様の試みはすでに開始されている。例えば、鎌田康男ほか訳著『ショーペンハウアー哲学の再構築』、法政大学出版局、二〇〇〇年。鎌田康男「若きショーペンハウアーにおける『表象としての世界』の構想―ショーペンハウアー研究の新視角を求めて(第一部)―」、『武蔵大学人文学会雑誌 第19巻 第3・4号』所収、一九八八年。同著者「若きショーペンハウアーにおける『意志としての世界』の構想―ショーペンハウアー研究の新視角を求めて(第二部)―」、『武蔵大学人文学会雑誌 第20巻 第3・4号』所収、一九八九年。

(3) WWV I, S.157. (邦訳、二四八頁)。

(4) ebd., S.163f. (邦訳、二五五頁)。

(5) Arthur Hübscher, „Schopenhauer in der philosophischen Kritik“, In: Schopenhauer-Jahrbuch 47, 1966, S.47f.

(6) der Zustand des reinen Erkennens. の用語は他「純粹な認識主観 reines Subjekt der Erkenntnis」などのヴァリエーションをもち、さらにそこに「永遠のewigens」また「意志を失くしたwillenlosen」などが挿し挟まれて表記されることもあるが、意味するところは全て同じであり、本文では「純粹認識」で統一した。

(7) ミシェル・アンリは、ショーペンハウアーが「意志としての世界」を「表象としての世界」から、つまり、結局のところ意志を表象に還元して説明しており、ショーペンハウアーが自ら提言した、意志の表象への還元不可能性という特性と矛盾するのではない

か、と批判している。これは見当違いの批判である。(ミシェル・アンリ『精神分析の系譜』山形頼洋ほか訳、法政大学出版局、一九九三年、二九二頁)。

(8) WWV I, S.157. (邦訳、二四八頁)。

(9) ebd, S.158. (邦訳、二四八頁)。

(10) 奥村敏氏は次のように述べている。「ショーペンハウアーにとつては、身体の動作や振る舞いのすべてが、それが普通の意味で意志的であろうと非意志的であろうと、すべてが、いやそれどころか身体そのものが意志の現れ、現象である。したがって、行為論で普通に語られる「意志」とショーペンハウアーの言う「意志」は決定的に異なるのであり、彼の言う「意志」は、普通の意味での行為に限定されないより広い射程をもっている」(「ショーペンハウアーと身体論」、『ショーペンハウアー研究 第2号』、一九九五年、七九頁)。

(11) WWV I, S.165f. (邦訳、二五七頁)。

(12) ebd, S.168. (邦訳、二五九頁)。

(13) ebd, S.162. (邦訳、二五三頁)。

(14) ebd, S.163. (邦訳、二五四頁)。

(15) ebd.

(16) ebd, S.159. (邦訳、二五〇頁)。

(17) ショーペンハウアーには「私ならざるもの」という用語はない。

(18) WWV I, S.161. (邦訳、二五二頁)。

(19) ebd, S.241. (邦訳、三四一頁)。

(20) ebd, S.256. (邦訳、三五七頁)。

(21) ebd, S.403. (邦訳、五三一頁)。

(22) 参照、ヤールコフ・フォン・ユクスキュル『生物から見た世界』日高敏隆・野田保之訳、新思索社、一九九五年。

(23) ebd, S.558. (邦訳、七一〇頁)。

(本学大学院博士課程・哲学)